帆足氏と二日市宿

■帆足氏と二日市

江戸時代の初めから、御笠郡二日市村庄屋を代々世襲してきた帆足家の甚三郎が、庄屋役を引退した後の正徳４年（1714）に、自家に伝わる古文書や古老の話、自身が関与した二日市宿の事件等を記録したのが『二日市宿庄屋覚書』(筑紫野市指定文化財)です。

この覚書の中には、甚三郎より６代前の先祖藤兵衛尉が、筑前守護代陶興房からもらった感状（戦功による賞状）を載せています。

文亀元(1501)年閏6月、大内氏の家臣である杉兵庫助弘隆が守る豊前馬岳城に、大友氏の援助を受けた少弐資元が攻め込み、城主杉兵庫助を討ち取りました。しかし、その1ヵ月後に大内勢の援軍に攻められ、資元は大敗しました。この援軍にいた武将の一人が陶興房で、この時の戦功によって帆足藤兵衛尉は感状を与えられたのです。

その後、帆足氏は、大内氏の家臣、陶興房の家来となったようで、天文８(1539)年ごろ太宰府天満宮領の三笠郡紫庄を支配し、同23(1554)年頃には、観世音寺領平野社も支配していたようです。

しかし、永禄元年(1558)～２年に豊後の大友氏が筑前に進出してきたため、帆足氏の三笠郡紫村支配は破れ、大友氏に対抗するため、肥前から筑前の失地回復に乗り出してきた筑紫氏の家来となったようです。

そして、それから約20年後の天正６(1578)年、太宰府の南に位置し、岩屋城・宝満城と対峙する天拝山の武蔵城に、帆足弾正という人物が城番として在城しました。この時期、帆足五郎兵衛、帆足備後、帆足善右衛門などの名前もみえることから、帆足一族が三笠郡南部を支配し、北部の岩屋城・宝満城を守る大友勢、高橋紹運と向き合っていたようです。

天正15(1587)年、秀吉が九州を平定した後、筑前領主となった小早川隆景は、太宰府天満宮領200町を安堵し、紫庄30町は二日市村5町を残して天満宮領となったため、帆足氏は再び紫庄を失ってしまいました。しかし、この時、帆足新右衛門という人物が二日市村庄屋に任命され、以後、江戸時代半ばまで代々庄屋役を世襲することになりました。

筑紫野市武蔵より撮影された天拝山と中腹の飯盛城跡（明治39年撮影）　両城を総称して「武蔵城」と呼んでいたようです。

■二日市宿

二日市は古くから交通の要衝で、江戸時代になると、日田街道の宿場町として整備されました。長崎街道が開通する前は、諸大名らは必ず二日市宿を経由していたといわれます。

『二日市宿庄屋覚書』には、天正19(1591)年正月、筑前領主であった小早川隆景が伝馬(人馬継立て)の使用について制限した制札が載せられており、二日市が荷物輸送を行う宿駅として整備され、厳重な管理が行われている様子が分かります。それから約20年後の慶長17(1612)年にようやく冷水道(長崎街道)が開通し、山家宿や原田宿が設置され、多くの諸大名は長崎街道のほうを通行するようになりました。

カギ形に曲がる二日市宿の町並み

さて、宿場町としての二日市宿の範囲は、中町、下町が二日市村にあり、上町が紫村となっています。明暦3(1657)年正月、二日市宿の宿役が繁多で人足不足になるのを補うために、隣の紫村より14軒を加えており、二日市宿は、二日市村と紫村の2村で構成されていたことが分かります。宿場内には、藩主の別邸である御茶屋が延宝5(1677)年に建てられ、11年後の元禄元(1688)年に吉田七兵衛という人物が御茶屋の管理を行う御茶屋奉行として赴任しています。宿場の出入口を示す「構口」は、宝永7(1710)年8月に幕府巡見使の通行に備えて築かれましたが、現在は御茶屋や御茶屋奉行所、構口ともに残っていません。宿場跡は、現在の二日市中央通り商店街で、カギ型やL字に曲がる道などが宿場の面影を残しています。

また、『二日市宿庄屋覚書』には、二日市を中心とした史跡や伝承が記されており、筑紫野市の地域史に欠かせない史料といえます。同書に記載されている紹運塚、六地蔵、二日市八幡宮銀杏樹、川船、鯰石については、「ちくしの散歩」の別号に詳しく紹介されていますので、あわせてご覧下さい。(有田 和樹)

参考文献
『筑紫野の地方史』近藤典二 1984 葦書房
『筑前の街道』近藤典二 1985 西日本新聞社
『筑紫野市史　通史編』1999 筑紫野市